明治三十五年十二月

崇廣

第拾七號

滋賀縣立第一中學校崇廣會

◎崇廣　第拾七號目次

◉論評考說

○輿望の中心たる中學生徒の氣風　會長　西村謙三
○國家の觀念　特別會員　平川常太
○體育　特別會員　水野透
○何にして吾々は生れ出でしか　第五年級　賀來俊一
○攻擊　第四年級　野村佐一郎
○服裝を論ず　第三年級　伊藤宗太郎
○健康と旅行　第二年級　倉橋藤二郎
○克己　第一年級　那須野一乘

◉文苑

○杯記　特別會員　服部愛軒
○斷雨殘雲錄　特別會員　新井無二郎
○北の荒磯　第五年級　澤村胡夷
○草堂の青年　第五年級　木村二郎
○客舍の雁　第五年級　野村靜軒
○竹亭の避暑　第四年級　中村祐寛
○雨の夕暮　第四年級　中川醇
○湖のほとり　第四年級　橋本久一
○田舍の舊趾と絕景　第四年級　金谷杏甫
○涙痕日記　第三年級　北村力
○歸省の記　第三年級　寺本仁三郎
○春のたのしみ　第三年級　飯村祐念
○あはれ　第三年級　谷本眞一
○靜女緒環の歌後に書す　第三年級　高岡憲治
○盤狩　第二年級　野間莊三郎
○夕立の記　第二年級　脇利右衛門
○月　第二年級　塚口佐太郎
○漢詩二首　特別會員　樋口樸堂
○聽杜鵑　第五年級　野村靜軒
○秋夜讀書外二首　第五年級　近藤兵一
○湖亭秋望外一首　第四年級　中村竹坡
○櫻花外一首　第三年級　飯村吳川
○晩秋の幽谿　第五年級　澤村胡夷
○古城山の春　第五年級　大久保章彦
○城山　第三年級　村上義一
○落花集　第五年級　野村靜軒
○和歌四首　第三年級　高岡憲治
○和歌一首　第二年級　石田孝三
○俳句五首　特別會員　樋口無我
○拾穗集　第五年級　野村靜軒
○俳句　第三年級　小池周藏
○俳句　第二年級　重森平一郎
○俳句　第一年級　横田諒圓

◉小品漫錄

○うすひげ日記　第五年級　澤村胡夷
○閑窓漫筆　第五年級　廣瀨文豪
○三の數に寄す　第四年級　野村佐一郎
○端艇競漕會を觀る記　第四年級　石田孝三

◉雜報

數十件

◉會告

十數件

謹みて舊新兩校長に白す

我が前校長市瀨先生は今秋八月先生の鄕里なる鳳鳴義塾に聘せられ其塾長として親愛なる子弟を薫陶せらることゝなりその後任として當時鹿嶋中學校長たりし西村先生は我が校に來任せられたりき今茲ゝ崇廣第十七號を草するに方り我が舊新兩校長の交迭につき聊か卑辭を陳し一は以つて惜別の意を表し一は以て歡迎の誠を捧けんとす

我が前校長市瀨先生は我が校に在任せられしこと茲に三年其間に於て鋭意我が校の進歩發達ゝ盡瘁せられ外には我縣の狀勢を酌量し內には生等の訓育に從事し孜々として倦ます撓ます我が校の爲めゝ規畫經營せられしこと枚擧するに暇あらず將に九仞の功を收めむとするに際し俄然我が校を去て歸鄕せらるゝの止むを得さるに逢ふ生等之を遺憾となすされども生等の今日あるは偏に先生敎誨の賜なりこれ生等が深く肺肝に刻して長く遺忘せざらんとする所なり

我が新校長西村先生は幾多の中學校長として育英の任に膺られしこと十數年その敎育界に貢獻せられし所知るべきのみ今や我が校に來任を辱うし日々ゝ先生の謦咳に接するを得生等の幸慶何者か之ゝ過きむ伏して望む先生の學德と經驗とを以て我が校風を一振し年々に濟々たる人材を輩出し燦然として敎育界に光彩を放つの進境に達せしめ給はんことを

崇廣　第拾七號

論評考說

輿望の中心たる中學生徒の氣風

會長　西村　謙三

國運の盛衰は國民氣象の反影にして國民氣象の消長は學生の元氣よりおる蓋學生は國家の脊骨國民の活力にして之をして獨立健全ならしむる所以の唯一の具おればおり見よ明治の維新は尊王の大義を唱へたる學生の鼓吹におり今日の立憲政体亦た民權を叫びたる學徒の手におりしにあらずや世人動もすれば學生を輕視して國家の進運に關係おきものとおすは思はざるの甚しきものおり

我明治の天下は　叡聖文武おる　今上天皇陛下の威稜によりて國民の團結日に鞏固とおり今や其餘力を以て歐亞の大陸に其手を延さんとするの時に當り國民に外長の氣象おく學生に獨立自尊の元氣おくんば我國運は中途挫折の悲境に陷ゐり外人をして日本人又た終におす能はざるおりとの言を發せしむるに至らん亞細亞の大陸其國多しと雖能く其獨立を維持する者幾何かある印度は既に英國の寶庫おり支那の現狀は累卵も啻おらず其他朝鮮暹羅の如き一として危殆おらざるはおし此時に當り我帝國獨力を以て悲運挽回の衝に當り西人をして黃色患の語をおさしむるに至りしは大に我が元氣の旺盛を証し人意を强ふするに足るものありと雖此國民の後繼者たる學生の氣風果して能く時勢の要求に適するものありや

當今の新聞日として學生の墮落を報せざるはおし曰く某學生の破廉耻曰く某學生の酒色沈溺曰く某學校生徒の同盟休課と豈嘆ずべきにあらずや且之を校長及び教師に質すに皆曰く我校の生徒は不勉强あり曰く試驗學問に汲々たり曰く師弟の情義に疎ありと而して一も賞讃の語を耳にするを得ず豈遺憾あらずや蓋し學の進まざる德の修せざるを以て責を教師に嫁し其身に反省するの力おくんば何れの日か學德の進捗を期せん學德進まずんば何れの日か自信の念を堅くするを得ん自信の念堅からずんば何れの日か克己の力により堅忍不拔の氣象を發揮するを得ん嘻今日の學生は反省の力おく自信の念おき薄志弱行の徒おるか抑も遊情放蕩進取の氣象おき亡國の民おるか

然れども是れ學生の暗黑面を描きたる悲哀的觀察のみ豈他の一面に樂天的觀察の餘地おからざらんや今學生中其數に於て最も多く其世論に於て最も不行儀の評ある中學校生徒に就て之を視んに我全國中學校の數は官公私立合して大凡三百とす今一校の生徒平均數を約三百五十とすれば其總數に於て一萬を超ふる五百ありとす豈盛おらずや而して生徒各自に其目的を問へば陸海軍の生徒を希望するもの高等學校より大學に進まんと欲するもの其他法律醫學等の專問に身を委ねんと欲するもの或は實業に身を投ぜんと欲するもの等其種別甚だ多しと雖其卒業後に於て己を利し國家を益せんと欲するに於て一おり而して上記の諸官立學校が優に其入學者を得適當の學生を收容し得る所以のものは中學校が年々許多の卒業生を出し此等の學校をして其中に就き善良おるものを撰擇するの餘裕あらしむればおり況んや此等諸學校に於て成績良好學術に工業に歐米の先進者をして後に瞠若たらしむる良生徒の前身か中學校生徒おりしの實ありとせば二十七八年の役と北清の戰とに於て勳功をおしたる軍人等が中學校より出でたるもの甚だ多かりしとせば之を目して反省の力おく自信の念おき薄志弱行の徒おりと罵り遊惰放蕩進取の氣象おき亡國の民おりと笑ふは抑も誤謬の甚しき空論と云はざるを得ざるおり

中學校に對する世論彼れが如く喧々たり然も其實際に於て此の如く有望おりとせば其實際と世論と相合せざる所以のものは何ぞや蓋世人望を中學校に屬する甚だ大おり之を以て其腐敗せる一部を見て慷慨悲憤の言を發するのみ三百の學校中五六の不整理のものありたり迚豈深く慨するに足らんや一萬の學生中少許の墮落者ありたり迚豈深く慨するに足らんや然れども中學生徒は國民の精髓おり知識の源泉おり氣象の根本おり之れ元氣鬱勃たる國民が少許の缺點をも寛假せず嚴格おる批評を加ふる所以にして國民の開發か此等侃々諤々の議論に負ふ所少かざるは事實の証明するところおり

余は今より進みて中學校に於ける二種の弊風を記し世論が中學校に對し囂々たる所以のもの必ずしも其故おきにあらざるを示さんとす其第一は文明の外形に醉へる肉食家の惡風と奢侈の汚俗とを媒介する弊風にして此等の生徒は其身邊を華美にし其携帶品を奇麗にし服は小倉地おるべきも羅紗にあらざれば滿足する能はず一B二Bの鉛筆不可おるにあらず然も四Bに非ざれば彼等の滿足を買ふ能はず二錢の界紙能く事を辨ず然れども三錢四錢の界紙能く彼等の間に流行す一種の奇品小間物屋に現はるれば一週日を待たずして全生徒の間に流布す其好奇心に富み其流行を逐ふの盛おる其金錢を重要視せざる皆明に彼等が富豪の子弟にして奢侈を競ふの風おるを証す而して其學科の成績を問へば英語五十點數學四十點博物四十五點等一も良好のものおるを聞かず然のみおらず彼等は劍道柔道を好まずベースボールやフットボールを喜ばず下宿屋の會合に卷煙草を燻じて菓子店の集會に小說を談じ貴重の時間を空費するもの甚だ多きを見る之を元氣ある新日本の學生と云ふべきか而して其第二種の弊風とは所謂慷慨家の糟粕を嘗め封建武士の皮相を慕へる學生にして彼等は前記の學生と反對の態度を取り衣は肝に至り袖は腕に至るを善しとし其帽は破れたるを貴び其服は垢付たるを

好み手に大なる棍棒を携へ啖然として他を睥睨し常に學生の氣骨なきを慨し喜びて燕趙悲歌の士を慕ふ彼等は好みて擊劍を勵み柔道を練るも其學科を査すれば數學四十點國語四十五點英語五十點等一も善良なる成績あるを見ず然のみならず彼等は滿腔の慷慨心に驅られ其己れに習はざるものを以て柔弱となし虛惰となし之に向つて暴行を加へ學校の煩を來さゞるもの殆んど鮮し而して其机上に陳列する所のものを見るに英語直譯數學解式、試驗問題集等にして試驗前に於ける彼等の勉强は前記第一種の學生と共にカンニングブックに地理歷史の要點を記し數學の公式を載するにあり其成るや窃に之を袖にし平然として試驗場に入り機を見て變を窺ひ能く監督者の目を偸み所謂スライによりて成効するを常とす噫是れ果して曩に士氣の振はざるを嘆じ學生の腐敗を絕叫したると同一人なるか何ぞ其表裏矛盾の甚しきや現時三百の中學校中前記二種の惡分子を有せざるもの果して幾校かある蓋前者は富豪の反影高襟者の雛兒にして後者は貧者の後身壯士の卵子なればなり而して是れ果して信念堅き獨立の氣象ある學生の所爲なるべきか學生墮落の原動力は實に此二者中に存すとせば我等豈恐れて警めざるべけんや

余は既に中學校の二大弊を叙せり然れども尙ほ此外に一大弊風の伏在をるを認む何ぞや彼等に自己を改善をる進步的意志の缺乏是なり此等多數の學生は其目的學德の修練にあらず唯中學校の卒業にあり之を以て其心裏に懷抱する所の理想（假に理想ありとせば）甚だ卑近にして殆んど言語に絕するものあるなり彼等は可成く課業を容易にし可成く遊惰に日を送り唯卒業證書を手にし之を以て父兄に誇り社會に示さんとす故に其教場にあるや勞せずして功を收むるの手段を考へ教師に向つて無益の質問を試み學科の進行を妨くるを事とし其試驗前に於ては試驗範圍の縮少を求め試驗問題の輕易ならん事を請ふ等其醜態名狀すべからざるものありて而して嚴格なる教師が其職分に忠實ならんが爲めに其問題に於ても其範圍に於ても一步の假借する所なく斷然其信ずる所を行ふあれば衆生徒の耳目は直に彼に集中し彼を以て苛酷となし不親切となし進みて其私行を訐き（假に缺點ありとせば）其學力を評し遂に衆生を煽動し同盟して其課業を休み誠實なる彼をして遂に其身を置くに處なからしむ是れ果して進步的學生の所爲なるか德を修め學を研き二十世紀の社會に獨立獨步せんとするものゝ所爲なるか社會は進步的なり外界は駸々として一時も停止するなく學藝に工業に日進月步の時に際し中學生徒獨り同所に佇立して一個の卒業證書を手にするも遂に何の益する所かある學生たるもの少し思慮する所なくして可ならんや

中學生徒は他日國家の中堅となるべきものなり之れが養成其宜しきを得ざるは國家の危殆なり秩序なき學生は國家の規律を破るの民なり忍耐なき學生は柔弱國を誤まるの徒なり嚴格なる教育に耐ふる能はざる生徒は他日列强と文を競ひ武を爭ふの時に於て彼等に對抗する能はざるの輩なり國を一等に列する者此の如き學生を有せば他日の憂ひ蓋計るべからざるものあらん

眼を轉じて世界の大勢を達觀せよ歐米の大陸亞細亞の平野悉く我大和民族が才を奮ひ智を鬪はすの處ならざるはなく熱帶の地寒帶の士皆我櫻花國民が其勇を鼓して元氣を發揮するの地ならざるはなし貧者は往きて資產を彼土に造るべく富者は進みて利源を彼地に開拓すべし噫明治の聖世は千歲一遇の好時機にあらずや汝の才を研き汝の國語英語を練習せよ他日商業界文學界に其光輝を發するの時あるべし汝の精神を練り汝の數學物理化學に誠實なれ他日工業界武術界に其勇壯なる氣象を現はすの時あるべし二十世紀の文明は其光輝を學生の手によりて發し世界の大事業は學生の勤勉によりて其果を結ぶとせば其責任豈大ならずや其愉快亦た大ならずや

中學校生徒にして少しく天下の大勢に通じ自己の責任を知り其開拓すべき利源の甚だ大なるを知らば彼等五

尺の身尙ほ其甚だ小なるを嘆じ五年の歲月尙ほ其甚だ短きを恨むなるべし學生にして自覺する斯の如くならんかカンニングブツク何の要かある試驗問題の難易何の意に介する所かある敎師の嚴格何の訴ふる所かある見よ我大和魂と稱せらるゝ正宗の名刀も名工の鍛錬によりて其光を發するにあらずや今日我國產として海外に輸出せらるゝ羽二重も組繭を精練したる結果にあらずや學生にして此理を曉り克己の力を以て自己を鍛錬し快活の心と進步的意志とを以て學を練り德を修めば其志想上に一大變動を來し新進國の學生として將た帝國の後繼者として誇るべき學風を中學校に現出せるを得ん而して我滋賀縣々立第一中學校生徒諸子は之を以て自己の責任とおし天下に率先して中學校氣風改良の先鋒とおる能はざるか

國家の觀念

特別會員　平川常太

歷史上、政治上より觀察したる國家の說明は他日に讓り、茲には法理上の意味に於ける國家の觀念に就て略述せんとす、

(一)　國家は一定の領土を有す、

凡そ人の組合團体に二種あり、人によるの團体及び土地によるの團体是れあり例へば數人相より共同して學術の團体をおし賣買の團体をおすが如きは團体の基礎人にありて場所にあらず、一つの部落と云ひ又は山林水利の組合と云ふが如きは一定の場所、土地が其組合團体の基礎たり、其土地を去るものは其町村の人にあらず、其土地に來り住むものは其町村團体の一員たり、團体の基礎土地にあるあり。國家は此土地によりて成立する團体の一あり、土地は唯、國民が居住する場所と云ふのみにあらず、一定の版圖を以て國の躰軀とおすあり、土地夫れ自身が國の構成分子たり、固より商事會社にても學術的寄合にても人間が存在するには或る場所、或る土地に於てするは勿論あり、併し團体の觀念上、土地を以て其要素とおさゞるあり、之に反して國家は唯、人が或る場所に住むと云ふ事實のみあらず、土地の存在が國家の國家たる要件をおすあり、土地を以て國家の要素とおす觀念は實は近世の國家思想に於て發達したるあり。

古の國家は必ずしも此觀念を必要とせず、往昔、土地多く人少なき時代には別に「土地を所有せ」と云ふ觀念おし、恰も現今大海、大洋が何人の所有とも認められず、何人も自由に通行し得るが如し、故に土地の所有と云ふ觀念もなく、又一定の土地を其國の領地と見做す觀念も薄し、唯家族制度の結果により、又は戰爭の結果により一族の主長として、或は腕力の强きものが多數の人の上に君主、主權者として權力を行ひしのみ。人と人との關係が主となり、多數の人が一定の主權に服從することが國の第一に發達したる關係にて、一定の土地を自己の版圖と見ることは古昔には發達せざりしあり、支那の古への國家の觀念若くは羅馬の隆盛時代に於ける國家主權の觀念は君主は一定の土地を領する人にあらず、世界の王たる觀念なく、或る土地を領するにあらず、天下を統治せるあり、凡てあらゆる土地は率土の濱も皆君主の領する所とせり、外國と云ふことを認めず、我國、外國と云ふ觀念は對等の國あることを認むる言葉あり、彼等は天に二ツの大陽なきが如く、地に二王おしと云へり、唯蠻民は未だ王化に浴せざるのみ、天子と同等おる君主が世界に存在することを認めざるあり、歐洲人の所謂 Universal empire の思想あり、此世界主權の思想に於ては土地が國の要素ありと云ふ觀念の發達すべき理由おし、一定の土地が我國ありと云ふことなく、到る所我主權の土地あり、故に支那の主權の思想と羅馬の世界主權の思想とは唯、君主が人民を征服し統治すと云ふ對人的の觀念の外土地を以て要素と見做さゞりしあり。

國家と云ふ觀念は開化したる人民の歷史に於て國と國とが相對峙するに於て發達せり、希臘に於て國家と云ふ觀念が早くより發達したるは此故あり、希臘と羅馬とを比較するに希臘は國家思想が發達し、羅馬は法律思想が最も能く發達せり、此れ偶然のことにあらず、歷史上原因あるあり、希臘は小部落に分れ部落相互に競爭し、競爭の結果、國の組織が堅固となり、諸國相對して常に衝突し、戰爭したるが故に自國と敵國との區別の觀念を生じ、國家思想最も發達せり、羅馬は統一せる大國あり、其大國を支配するには法律が必要あり、故に整然たる法律が制定せられ、法律の觀念が著しく發達したり、支那の歷史に於ても其跡同じ、國家の觀念が最も盛にして國家論が盛に行はれたる時代は所謂春秋列國亂世の時代あり、王朝が有名無實となり各豪族諸侯が自立して國をなす、各對等あるが故に戰爭止まず、一人の民、一寸の土地をも互に相爭ふ、此に於て國家と云ひ、臣民と云ひ、我國土、領土と云ふ觀念が發達せり、支那の法制は太平の世に最も著しく發達したれとも政治論、國家論は蓋し周末諸侯割據の封建亂世の時代より盛なるはなし、以て國と云ひ、一定の土地を自己の領土として專ら占有するの觀念が諸國相對峙して各對等の國をなすの時に發達したるものたるを見るべし、一定の土地を國の版圖となす結果は其土地が國の主權の及ぶ所なりとなすあり、固より土地の所有權が國家に存するの意味にはあらず、統治權が行はるゝと云ふ意味あり、國家の發達に就て古昔の家族制度の時代には家と云ひ國と云ふことの區別なし、故に一家族が或る土地に住居するも家族と云ふ觀念は親子、夫婦、兄弟等の人と人との觀念にして土地を其觀念の要素となさず、此に於て國が君主、主權者の一身の所有物の如く見なされ、團體の觀念と、土地が主權者に屬する觀念とが別々に見做されたる時代あり形容して云へば君主が右の手には臣民を所有し左の手には自己の財產たる國土、領地を持ち、人民と土地とが關係なく、君主の二ッの別々の財產の如く見做されたる時代あり、近世の觀念は此れと異なり、土地と人民とは密着して國をなす要素たるあり、單に國の財產に二あり、一は臣民、一は國土と云ふにあらず、國民團體が一定の土地を自己の土地とし、土地によりて立つ處の人民の團體が國をなすの觀念あり。

(二)　國家は多數の人の共同團體たり、

東西古今を論せず、凡て國と云ふときは一定の國民を以て成る團體あること明あり、固より人數の多少、土地の廣狹は國家の觀念に關係せず、一家族か即ち獨立の國家たる性質あることあり、多數の人の團結と云ふことは個人孤獨の生活に反對する意味にして必ずしも數に一定の分量を意味することにあらず、又多數の人が一定の場所に存在するも共同團結をなさゞれば國の基礎とならず、共同團結とは個人が全体の分子として個人孤獨の生活の外に團体的生活を有し、團体として自己獨立の生命目的あるを云ふ、唯、多數の人の並び存すると云ふ器械的の觀念にあらず、共同團体をなす所以は沿革的に種々の有樣あり、通常の歷史によりて見れば社會の原始の有樣は蓋し血族團体が最も古きものなるべし、子孫が父母の保護の下に一の共同團体をなすこと即ち家族的の組織が人生の自然に出で人の最も古き團体の形なるが如し、此れ血族の同じきものが血族的團体をなすあり、其父母を崇拜するの念は推して父母の又其父母に及ぼし、祖先を同しくするものが一の血族的社會即ち民族的團体をなしたるあり、人種の同じきものが社會をなし國をなすと云ふは此事に外あらず、人種を同じくするは祖先を同じくするあり、此血族團体の組織が最も古く且つ今日に及ぶ迄最も勢ある國家社會をなすことは東洋にても西洋にても事實として現在吾々の見る處あり、學者或は血族的團結の外に純粹なる共和團結あるが如く說明せり、乃ち個人孤獨の人が始めは禽獸の如く、山野に存在して孤獨の生活をなしたるものか、相倚り、申合せて團体を形造りし場合、即ち平和團体 Friedens genossenschaft ありと云ふことが事實あり、又天然の經過ありと說明せり、併し其例として擧ぐる處の事實を見れば多くは純粹

の共和團体にあらず家族制の血統團体の一つの變体たるに過ぎざるあり、例へば古昔の印度日耳曼人が亞細亞の西部より歐羅巴の東部に漂泊し、所々に殖民をおしたり、其殖民團体は平等の人が共同の平和を圖る爲めに團体をおしたるものにして必ずしも父母の下に子孫が團結し、祖先の威力によりて之を支配すと云ふが如きことおし、近くは歐人が北米に殖民して國をおせしが如しと、併しながら此等の例を以て人間が當然に固有の力として平和の團体をおしたりと見做すは不可あり、古の日耳曼人は日耳曼人として同じ民族あり、同じ民族のものが增殖して新開地に部落をおせるあり、既に母國に於て血族團体の組織に於て發達したる民族が新ある土地に移りたりと云ふ迄あり、歐人が近世米國に於ける例も同じ、故に人の自然の團結として或る最も古く最も普通あるものは血族による團結ありと斷言すべし、小にしては家族制度たり、大にしては民族制度たり、歐羅巴人種、日耳曼人種、日本人種と云ふが如く、同じ人種のものが相倚りて團結をおすと云ふことが即ち子孫が父母の保護の下に立つと云ふ主義を貫徹したるものにして此主義が人の今日迄の社會的組織を支配したるあり。

(三)　國家は一定の主權を有す、

純粹ある血族團体に於ては血族的關係に於て最も祖先に近きものが團体の主長たること自然の勢あり、故に父母を尊び祖先を崇拜し、之を共同團結の主たる目的及び力として團体をおしたること東洋及び希臘の歷史に於ても明あり、もとより種々の社會的變動によりて此純粹ある關係を維持する能はざる民族も多し、併し共同團体と云へば、必ず、父母、君主、又は國權、主權、名は何れありとも、兎に角、一の主たる力ありて團体を支配するものあり、此力が即ち國家主權あり、國家の觀念に於て最も重要ある主權の觀念は團体の存在に離る可らざるものたり、歐州の十八世紀に於ける哲學者が想像したる絕對的平等ある人が團結して國をおすと云ふことは想像すること能はず、共同團体と云へば一の主たる力ありて、即ち團体の公の權力ありて團体の分子が之れに服從するによりて團体的生存あるあり、家にして家長權おく、國にして主權おければ家と云ひ、國と云ふ團体的生存おし、唯、家と云ふは合宿所の如く同一の場所に存在すと云ふのみにては此れを組立てる分子の孤獨の生存の外、家としての存在おく、國としての存在おし、其分子は日々、年々新おれども家と云ひ、國と云ふものゝ繼續せる團体生活あるは團体を主裁する中心の力が存在するが故あり、其力おければ共同團体にあらず、主權おければ國家おし、人の社會的生存に必ず主權の伴はざる可らざる所以は又他の論理上の觀察にて明あるべし、人の天然の腕力智力に差等あるが故に其社會をおすや、必ず優者と劣者との區別あり、權力は此に發生も、權力とは優劣の間の關係あり、其權力が劣者を撲滅する爲めに用ひらるゝか、之を保護する爲めに用ひらるゝかは別問題にして兎に角、人が社會をおせば權力が行はるゝことは論理上必然の結果あり、優劣おき平等の人が社會をおすおらば別に約束をおさゞる以上は權力服從の關係ある可き道理おし、併し事實上、道理上、各人平等と云ふことはあり得べからず、故に社會をおす以上は權力服從の關係は當然に存在するあり、其權力あるが故に社會を紊亂することもあり、又秩序を保護することもあるあり、其權力が社會の劣者を保護するによりて始めて家あり國あるあり、若し其權力が絕對的に劣者を滅ぼすときは遂に權力は獨立して自ら存在すること能はざるべし、故に社會の劣者を保護し、團結するに於て始めて權力が生存するあり、父母は其子孫を保護し、子孫は成長して父母の權力を受け繼ぐ、國の其分子に於ける亦同じ、主權は社會を保護せる力あり、若し此力おきときは社會は秩序を失ひ遂に個人孤獨の有樣とおるべし、此れ社會の滅亡あり、各人平等と云ふことを原則として社會を形造らんと欲するは全く矛盾した る想像おること明あり、例へば一家の組織に於て父子同權おらば家は存在せず、唯個人としての存在あるの

み、社會が若し各人平等ならば社會にあらず、社會の解散あり、歐羅巴にては今尙ほ社會主義、無政府主義等の名稱にて此說をなすものあり、社會の組織を打破せんと欲する主義あり、各人平等を主張する主義あり事實に於て行ひ得べからざるは何人も知る處なれとも此說が勢力を得て一時歐洲の國家を危くしたるは皆人の知る處あり、從て事實上、論理上、社會の生存には主力あることを要し、國家の存在は其主權の存在によりて辨識せらる。

之を要するに國家とは一定の領土を有し主權の存在する共同團體あり。

體育

特別會員　水野　透

夫れ躰操は体育要素の一にして体育は身体の健康を保持し其發達の原理を講究し人類天賦の生理に基き身体を完全無缺に養成せるを以て其目的とす而して其体育たるや教育上三大綱目の一にして智育德育之に隨伴す如何とあれば健康は智識の母あり德義の基あり都ての幸福の始めあり故に体育は智育德育より先あらざるべからず然るに之を顧みずして教育の完成を冀ふは恰も彼の根幹を培養せずして猥りに其枝葉の繁茂を望むに異あらざるものあればあり豈斯の如き不順序の教育を望むべきものあらんや然らば則ち教育を完全あらしめんと欲するものは先づ其根幹たる体育を完全あらしめざる可からざるあり、

然るに人智開明日新月歩人事漸く繁多を加ふるの時に當つて鋭意競爭を試み其捷算を得んと欲せば勢ひ非常の腦力を費やさゞる可からず而して其腦力や決して偶然に湧出す可きものにあらず必らずや身体の强弱に由て差異あるは喋々を要せざる所ありとす然るに茲に着意すること甚だ周到あらず知らずの間精神の過勞を來し身体の發達と相伴はず其平均を失し易きは古今の通弊ありとす其害や遂に直接其身の夭死とからざるも漸く脆弱を來し其極猶一層脆弱の子孫を輩出するが如き不幸あきを期す可からず果して然らば國家の爲め實に浩嘆の至りありとす豈戒飾せずして可あらんや況んや吾人直接に學生たる可き者に於てをや、

抑も身躰の發育は其原質を体外に取り以て之を体内に蓄積增殖するに由ると雖其原質は常に一定の分解作用を受け或は尿に化して体外に排除し或は炭酸氣若くは水氣とありて肺及び皮膚より排出し体質の消耗瞬間も止む事あし故に發育を完全あらしめんと欲せば間斷あく其原質を供給して其消耗を補充せざる可からず而して其發育と消耗とは互に相反するが如しと雖其消耗は生活機能の運營に因て起る者にして其實相須て離る可からざるものとす、

例之は手を以て一定の重量を一定の高さに擧揚する時は其重量と高さとに比例して手中の筋骨を組織せる若干數の細胞は忽ち消耗し去り更に細胞を新生して其缺を補給し其補給する處の資質に不足あき時は却て細胞を增殖し筋骨の發育を來す者あり、

故に身躰何れの部を問はず之を使用する事多き時は其部細胞の新陳代謝は倍々旺盛とあり隨て發育增大する者にして彼の鍛工の如き脚夫の如き常に其使用する部分の他部に比して筋骨大に發育をる者は乃ち此理に由る者とす是れ体育上体操の必要ある所以にして之に依つて細胞の新陳代謝を催進して其發育を旺盛あらしめ猶且つ全身を一樣に運動せしめて以て各部偏長の弊あからしめざる可からず然りと雖只運動のみ盛に行ひ之を補ふ處の原質に不足する時は決して完全の發育を望む可からず茲に於てか食物の供給其宜しきを得ざる可からず也食物能く其度に適するも生活上必要ある溫度の關係に於ては家屋構造の注意あかる可からず其外運動には一定の際限ありて必ず靜息の方法あかる可からず即ち体育上食物、衣服、住居、運動、靜息は最も欠

く可からざるの要件ありとす此五者にして適當なる時は能く其發達保全の目的を完全に經過せしめ天禀の定限に達せしむるを得べし然れども此編專ら說述せんと欲する處の者は運動即ち体操にありとす体操は壯快活潑にして体軀を自然の良姿勢に複らしめ諸關節の運動を自在にし以て其坐作進退の動作を輕捷にし各其宜しきに適せしめ且つ之に依て勇敢活潑の氣象を養成するものにして体育上最も効績の著大なるものとす、

故に之に依て有形的には身体各部の機能に偏重（例之は鍛工の手腕筋肉肥大、車夫の肺腸筋肥大に於けるが如し）なく且つ輕捷及び巧妙を暢發せしめ以て偉大强健の身躰を養成し無形的に於ては勇敢の氣力を發進せしむる事最も必要なりとす、

凡そ根本枯渴して枝葉綠色を呈するの草木はあらず實に体力の消長は氣力の發作に大關係を及ぼすものにして体力强健ならざるものゝ勇氣は恰も根本枯渴せる草木の日ならずして黃色に變ずるが如く其勇氣は次第に沈淪す可きなり、

西哲ロツケイ氏曰く强健の身体に非らざれば活潑の精神を含さずと宜なる哉古今宇內に名を轟かすの豪傑は皆强健の人に非らざるはなし豈只机に靠り書を讀み夜以て日に繼き積弱遂に痾をなすの徒にして能く偉業を成す者あらんや輙ち知る敎育の偏重を去り体育殊に運動に依て其强健を保持するの必要ある故に恰も飮食の欠く可からざるが如く宜しく日夕之を持讀して强健活潑の心身を養成せざる可からず然るに世間往々獸畜の飼養には注意周到なるも却て自己及び子孫の体育に意を注ぐこと甚だ不親切なるが如き事なきにしもあらず豈夫れ戒めざる可けんや、

体操の効益は前既に述るが如く著大なりとす要するに是れ身体健全に非らざるよりは決して之を望む可からず而して之を鍛錬して身心を强健ならしむる事素より一朝一夕の能くする處にあらず中年時代に於て斷へず

黽勉之を勵行するに非らざれば如何んぞや其目的を達成する事を得んや肝銘せざるべからず。

◎何しに吾々は生れて來たか

第五年級　賀來俊一

自分等は此地の上へ生まれて來て、段々少さい時から、飯喰つて大きくなつて來た、だん〳〵年が重なる、だん〳〵智惠が殖える、をまけに學問をする、德を研く、才を磨く、別段何のかの、あれのこれの、といふ差別はなく、軈て完全なる人間と成る土臺を作つて居る、是非とも立派な人にならなければならない、かうして人となる事を學んだならば……

偖て「人と成る」といふ六ヶ敷語は、之を解剖したならば、何ふいふ事なのであらうか、

何でもない、屁でもない、――其何んでもない事が、全く誤解されて居るには困るではないか。

先づ自分等が人間と生れて來たらば、人となる道を學ばずには居られない、つまり、人といふものにならなければ、造化の神に對して、第一に申譯が立たない。

といふたならば、造化の神は何故に自分等を作つて下さつたかといふ事を考へなけりやなるまいが、造化の神は必要があつて、吾々を作つて下さつて兎に角、人間の間で交はつて、生きて、死ぬべき時に死ね、と命令を下してをかれる、これが何だか、天命だとか、人間界で云ふて居るので

是に於てだ、諸君は解し得たであらうと思ふ、神は多數の人間を造られて、其內に「交はツて行け」と命令せられた、したならば人間は決して個人でない、――人といふ語は「人の間を共通する人」といふ意味であるといふことを斷言することが出來得るであらう。

共通せぬ人間は、自分勝手な、我儘な人間で、此世に居る要はない、山の中へ隱れて、早く死の命を待つて居るのがよい。

人といふ者は社會を成して居る、集まつて生存して居る、自分は其間に在りて活動し、飯を食らつて生をつなぐもので、自分の意見は人に語り、社會の他の人と共に立ち、共に成し、もるのが眞個の人間の務なることは、大低の人からば知つて居る、それに皆心得違ひをして居るとは、ナンと天に耻づべき、又不倫な事ではあるまいか。

でかういふ人を社會に用を成す人間といふ、これ即ち人であつて、かういふ人に成るといふことを夢にも誤解するものがあつてはならない、

予は語を換へて、之を曰ふ、——今迄陳べて來た、言論の推理に依つて——人間は人間の爲に生れ出でたものである。

されば自分等の學ぶのは人の爲に學んで居るのである、德を磨くのも、体力を鍛へるのも、これ皆、人の爲である、人の爲に學びて、人の爲に人となるのである、自分が活動するのは人の爲に活動するので、自分が勞働するのも人の爲である、自分の位地が高めたいといふのも亦、人の爲に高め、人に依りて高くせられるのである、名譽を得んとするのも、飯を食はんとするのも、皆それである、誤解し易き人よ、神の卑しめ給ふ人間よ、これを疑ふならば、此地球上に、かりに自分一人のみだと假定して見るがよい。

それだから自分一人通用の人は社會の害物である、なくて結構な人類である、何んと、そうではあるまいか。

「人の生れた理由」！實に解し易くして、少しも解せず、これほど六ヶ敷理由はあるまい、現にこんな理想の人が何人ある、却てこんなことといふと馬鹿にされて了ふのである、

それ世の中には、「何に人の事だ搆ふものか」といふ奴が、居る、人の爲に不利をするのは、天の目から視て又此理由から見て、つまり自分の爲に不利であり、不倫悖德なのだ、こういつたて、そりや容易に解るまい目の先きばか、見えやしないのだものその筈だよ。

かういふ人は自分勝手な人類の穀つぶしであつて、此世に在つて、自分勝手なやうに行かない、思ふ樣にならないと、厭世家とか何とか、洒落な事をいつて、山の中へ隱れる、奥座敷で、謠曲なんかやつて、自ら慰む、なんか言つて居る、

社會はそういふものでない、人と人と人と……が集り合つて、出來る以上は、人の爲に自分の意見を曲げねばならない、自分のみを通さうと思ふたつて、他の社會中の人に通せないけりや、人の言に隨はないけりやならない、こりや何でもない、天の命だ、唯々其事が天の與へなもツた人道の大本に違つて居るならば、徹頭徹尾曰はないけりやならない、その事によつたらば其人を天道の大害物として、殺つゝけて了はねばならない、これも亦天命だ、が併し世の中が忌らいにあつたとか、いふ人間に限つて(今日)、自分勝手な、慾情、あどからいふのが多いやうだ、却て天道を守りて、天の命に逆つた社會に處して、自分の正を透さうといふ人なら、そんな意氣地のない事はいはないよ。何んとそうではあるまいか。

それに付けて起る奴は、しわん坊といふもの、義俠心の何たるを辨へぬ人類、例令ば、あの澤山に金を積んで、炬燵の中で番をしてる、蟲のやうな奴、かれらは人から金を盜んだのである、社會に居て、他の人があつてこそ、其金も貯へられたのである、唯々公然手段よくやるか、惡るくやるかの違いで、意味は同じ事だと思ふ、しかもそれがいゝ加減に、金を積むと、隱居樣だといふ、田地、藏をこしらへて、炬燵の中に四五十歳位の人が、居眠つて一日の時刻も知らない、そして其外には、一生懸命人の爲に働いて居る、下婢下僕

が居て、犬猫同然に勞役して居る、こういふ事を以て、世の中が腐敗したといふのである、と予は確言する。これを大に革めるのが、吾々の任務ではあるまいか、いや左樣ぢやらふと確信する、

月が出た！、吟すのもいゝ。花が咲いた！、歌ふのもよい。人間と自然とは、こりや一致して居かなくちやならない、今日の人間に此腦髓があるならば、まだ〳〵此天の命、人倫の大本を以て、人間の頭の中へ、泌ますことが出來る、自分等はこういふ希望があるのである。

金を溜めかけりやならないもの、併し人の爲に溜めるので、此「爲に」といふ語にアクチヴとパッシブとを含むで居るといふことを失れてはならない、世の所謂我利々々根性といふのは、實に天道に耻ぢ入つたることで、人とあるものゝ、苟且にすべきことでない。

大体今迄言つて來た事は、實に人間の最も貴ぶべき大道であつて、これは忠孝五倫の道の大源だらふと、自分ばかりは信じてをる、もし此道がなくなるならば、世の道德即ち公德も忠孝五倫の道も皆失くなつて、道德地に落つ、とか何んとか六ヶ敷い事になる、なんと考一考しなくてはならぬでないか。

血氣ある人で、一氣力のある人で一才氣のある人で一學問もある人で一間に合ふ人で一忠孝は暗記して居る人で一髯のある紳士といはるゝ人が、皆この社會の無賴漢とならうとして居る人が澤山ある、自分の位地、利欲、の爲に二枚の舌も使ふ、賄賂も使ふ、人を貶毀する、實に話しにならつた事でない、かういふ人に利劍を下すのは又これ天の賜はりし命令なので、人と生れた理由の存する處なのである。

それにどうも、水臭い〳〵、氷のやうな人がある、澤山ある、人と人同士が水臭さ過ぎる、この世界を文明の生存競爭場として、我大和民族は、旭に匂ふ山櫻の下で生まれて、實に一家族でないか、それが互同士、恰も氷のかち合ふ樣で、水臭い〳〵、何んと天より受けて來た天眞の心に耻かしとは思はないか、同じ天照皇太神の末裔でないか、五十鈴川の流を汲み來つた大和民族同士でないか。

どうか、お互に、人の爲に身を研き、人の爲に人に學び、人の爲に成すある人とならうではないか。

攻　擊

第四學級乙組　野村佐一郎

人類と他の動物と異る所多しと雖、就中著しきは、人は社會的生活を爲し彼は單獨的生活を爲す故に我には共通の言語あり道理ありて萬事萬端社會全体を基礎とす、此に於て競爭起り制裁始まる故に一人の怠惰者あれば社會は之が制規を作り一人の仁者と雖社會は是を見棄てずして之を賞すべし、故に人の人たるを得るなり、是を以て相勵み相一致して業を爲し不知不識文明の域に達す若し其れ一の不法者あつて社會の秩序を破壞せんと企つる者あらば社會は之に向ひて攻擊をなす、攻擊てふ者はこれ人をして惡より善にうつらしめ野蠻を文明に導き奸者も正しくなり怠る人も爲めに勤勉の人となる、近く五十年前の日本は如何なりしか德川幕府の威光地を拂ひ騷亂四方に起り恰も大陽沒して月未だ出でざるが如く國家の危急旦夕に迫れりかの米英諸國の干涉攻擊なくんば豈よく今日の文明を見るを得んや、吾もし他人の攻擊なくば吾が目的をして萬丈の高きに屹立するを得ざるなり然り社會には攻擊あるが故に社會の体面を保つを得るなり吾輩は攻擊に因て生活し攻擊に因て進歩す豈攻擊の功大ならずや、虎の爪も他の動物の攻擊あるが故に益々するどく其他の猛獸も他より攻擊てふものある故常にいさましげなり實に攻擊や絕對的必要の者なり、掛直賣の近畿の奸商も東都の正札的の攻擊をうけて漸次改善に赴かんとも學校にても良生徒もて攻擊を惡生徒に向けなば學校は善生徒の集合を以て滿たされん攻擊の功何ぞそれ大なる、

然るに今や攻擊の性質の一方を解し惡漢聯合し善者に害を加ふる事往々これあり何たる誤解ぞや、或は容貌

の惡攻撃を初め或は其家の貧富を惡評し或は其人の天性を攻撃す何ぞその下劣かる、知らずや攻撃てふものゝ奥には必ず道理の存ずるを、不孝者を攻撃し不品行の者を攻撃す是れ誠により其益する所も亦大かり然るを無暗に天性を攻撃して以て得々然たるは實に遺憾の極にして、是が爲めに攻撃てふ有益かる言語の價値を損ずる事あらんも其は元と不學より起れる一種の誤解かれば高潔君子の夢にだに浮ふ所にあらざるかり

服裝を論ず

第三年級乙組　伊藤宗太郎

夫れ衣服の要たるや寒暑を避け、體温を維持し、聊か容姿を裝飾して人の品格を保つの具かる事は明かかりと信ず、然れ共、其良否を以て人の善惡價値を判定するの點に於ては未だ信を置き難きものあり、彼の衣服は時の流行を競ひ鼻下に八字の髯を蓄る者、必しも廟堂の器と云ふに非らず、腰に金時計を持ち口に卷煙草を薫らす者、必らずしも紳士に非ず、頭に千金の簪を頂き、指に燦然たる金銀寶石の指輪を鉗め、綾羅を以て身を包むもの亦必ずしも良家の子女と稱する能はざるべし。外貌を以て人の心底を知る能はざるや此の如し、而るに、或は詐欺の術に罹り、又は無智無德の徒を尊崇し、終には其身を過つもの多きは何ぞや、此れ未だ衣服の何者たるを知らざればかり。

然れ共吾々中等の教育を受け、將來國家の中堅たるべき者にして、衣服の華麗を好み、長袖緩帶都人士の風を學び、紳士然たる者あり、之れ亦誤解の甚しきものと曰はざるべからず、豈に慨歎の至りからや、古言に曰ふ、身に襤褸を纏ふも心は錦の如しと、此言以て服膺すべきかり。

土田(元辻)一三　森地茂郎

辻　信　福井祐次郎乃子名秦鎮、高橋序郎　山口廉民

岡田彌吉　澤村要太郎　近藤与一

水村二郎　篠宮賢　吉田新太郎　種村義淵

花木定三　野村外一　中野為藏　東篤清次　若林豊三郎

草川静三郎　廣嘉浩一　吉賀力餌　平瀬作五郎　廣瀬文豪

柴田善一　室谷喬三　平川常太郎　野村義雄

門根次郎　倉雅吉　樋口逢造　曾田忠大

大久保喜秀　加未俊一　小川廉三郎　田辺隆吉

玉樹顯曜　佐藤春吉　西村謙三　今村養達

成宮市太郎　吉居留松

川辺左郎　那須閑神　小出廣太郎

東戸留四郎　大曾根行一　松浦益雄　草塲孝尺　松本哲郎

岩嵜秀一　伊矢岐房太郎

周防正季　田辺諒三　堀房次郎　杉浦孝本　松井太四郎

廣辺智田桑原益方　福永作十郎　伊藤栄三郎　東郷安次郎

宇治原孝三　岡村佐次郎　池田衛　水野透　渋谷退二

中嶋達也　麦坂廣　中川俊二

田中哲之助　田中哲之助

廣野規矩郎　野中哲之助　田中藤太郎

の惡攻擊を初め或は其家の貧富を惡評し或は其人の天性を攻擊す何ぞその下劣かる、知らずや攻擊てふものゝ奥には必ず道理の存ずるを、不孝者を攻擊し不品行の者を攻擊す是れ誠により其益する所も亦大かり然るを無暗に天性を攻擊して以て得々然たるは實に遺憾の極にして、是が爲めに攻擊てふ有益かる言語の價値を損ずる事あらんも其は元と不學より起れる一種の誤解かれば高潔君子の夢にだに浮ふ所にあらざるかり

服裝を論ず

第三年級乙組　伊藤宗太郎

夫れ衣服の要たるや寒暑を避け、體温を維持し、聊か容姿を裝飾して人の品格を保つの具かる事は明かかりと信ず、然れ共、其良否を以て人の善惡價値を判定するの點に於ては未だ信を置き難きものあり、彼の衣服は時の流行を競ひ鼻下に八字の髯を蓄る者、必しも廟堂の器と云ふに非らず、腰に金時計を持ち口に卷煙草を薫らす者、必らずしも紳士に非ず、頭に千金の簪を頂き、指に燦然たる金銀寶石の指輪を鉗め、綾羅を以て身を包むもの亦必ずしも良家の子女と稱する能はざるべし。外貌を以て人の心底を知る能はざるや此の如し、而るに、或は詐欺の術に罹り、又は無智無德の徒を尊崇し、終には其身を過つもの多きは何ぞや、此れ未だ衣服の何者たるを知らざればかり。

然れ共吾々中等の教育を受け、將來國家の中堅たるべき者にして、衣服の華麗を好み、長袖緩帶都人士の風を學び、紳士然たる者あり、之れ亦誤解の甚しきものと曰はざるべからず、豈に慨歎の至りからや、古言に曰ふ、身に襤褸を纏ふも心は錦の如しと、此言以て服膺すべきかり。

健康と旅行

第二年級甲組　倉橋藤次郎

蒼顔瘠軀何とかく不活潑かるは、之れ現時多くの學生の狀態に非ずや、健全かる思想は健康かる身躰に宿る、優勝劣敗の今の世は、到底かゝる輩を入るゝの地を餘さず、彼等の中には學德備はりて優に一方に覇たり得べき者ありと雖、如何せん、身躰の不健全は之を許さず、空しく恨みを呑んで世を終るに止まんのみ、彼等亦將來の中堅國民として世界の活舞臺に立つべき義務ある者に非ずや、唯身躰不健全の一事、終に是を許さずとせば、哀れむべきの極にして、吾人苟も同胞たる者、之を坐視するに忍びんや、而して之が救濟の道たる、其手段甚だ多く、古來尚武の氣風と共に傳はれる劍柔両道の如き、若しくは近時輸入せる西洋諸遊戯の如き、各々特長を具へ、何れも奬勵すべき者かれども、余は此に快樂に利益を伴ふ旅行を以て、体育方法の第一に推さゞるを得ざるかり、寒風肌を劈く冬の朝、炎熱金を爍す夏の晝、單身飄然として家門を出づ、何ぞ其れ愉快かる、邊り淋しき秋の暮、絶壁に懸け渡せる丸木橋を越え、羊腸たる嶮坂を攀ず、日は將に暮れんとし前途尚遠く、退かんか來路遙かり、嗚呼其時其心果して如何ぞや、斯くして養はれたる忍耐力ありてこそ、他日獨立獨歩、社會に活歩し得らるゝかれ、櫻桃梅李咲き匂ふ春の日、數千尺の高山に登つて、四方を瞰下すれば、氣宇自ら擴濶たらむ、清流に舟を浮べ、幽邃の地に杖を引く者、良く名論卓說を成さむ、假令萬卷の書を看破し、坐上の空論に長ずればとて、足鄕闊を出でずんば、井底の痴蛙、何ぞ共に語るに足らむ、先人未發の深山、古今未知の海底を探り、都市村落を過ぎては、其の地の地理、人情、風俗を知り、名所古蹟に遊びては、英雄興亡の跡を吊ふ、斯てこそ、大理學者、大地理學者、大史學家とはかり得べし、

本邦人は多く旅行を好まず、或は目して贅澤とおす、余は其の何の故たるかを知るに苦しむ、彼の自稱紳士等が暑を山間海濱に避け、暴飲暴食却て健康を害す、之れ或は贅澤あらむ、然れども是れ等は實に飽衣暖食の徒の所爲のみ、これ吾人學生のおすを恥づる所おり、吾人の旅行は又自ら異おる者あり、然れども亦誤解する勿れ、吾々は彼の無錢旅行等の無暴の擧をおすに非ず、斯の如きは旅行に依て自信力を求めんとする吾等のおすに忍びざる所おればおり、

彼英國人の家庭に於ては、兄は東洋に視察旅行をおし、妹は加奈太に旅立つおど、凡ての事世界的にして、家族も亦彼等が歸朝して其土産談をおすを聞きて、以て無上の樂みとせり、彼國の今日ある亦宜あらずや、然れども斯かる事は我等現今の境遇之を許さゞれば、他日成業の曉を期するも決して遲しとせず、今は只其階梯として一日半日の暇を得て數里の地へ遠足し、以て足れりとせむ、

彼鉄血宰相「ビスマーク」が獨逸聯邦統一論は瑞西旅行に胚胎せしが如き、千古の達見家林子平の海國兵談が讀書堆裏に案出せられしに非らずして、山川跋跋の間に成り立ちしが如き、其他「グラストストーン」氏の伊太利旅行、池大雅の東北旅行、「ペートル」大帝の歐洲旅行等に古來英傑が旅行に依て無言の感化を得し事多きを見ば、諸子或は思ひ半ばに過ぐる者あらむか、未來の國家繼續者たる諸子、請ふ三省せられよ、

聊か所感を述べて諸子に呈す、余や元來文筆に拙にして胸中の十分の一をも尽し得ず、言或は露骨に過ぐるの恨みおき能はず、幸ひに微意のある所を察せられて不文を責むるおくば幸甚

克己

第一年級　那須野一乘

千人と角し萬人と戰ふて、一々之れを敗るは、何人も快とする所おり、而も、自己の慾情を制して、よくこれに克つは、更に一層快おるものおり、げに、百万の敵に克つよりも、自己に克つは、或点に於て慥に難事たるおり、見よ、古今の英雄豪傑にして、婦女に惑溺し、金錢の爲に節義を變ずるもの、僕指に堪へざるにあらずや、吾人はまづ他人を制せんよりは、先づ自己を制せんとす、古語に曰く、遠きに行く必らず近きよりも、高きに登る必らず卑きよりす、と、吾人の己に克んとするも亦その近くして易きものより始めざるべからず、請ふ、試みに之れを說かん、飲酒は學生として嗜好すべからざるものおり、喫煙は國法の禁厭せるものおり、如是きものは、一時の克己を以て遂げ得らるゝものにて、其慾に抵抗するは、決して難事にあらざるおり、飲酒の如き、喫煙の如きは、畢竟習慣に過ぎずして、必らずしも、其味の忘るべからざるものあるが爲にあらず、故に非常おる喫煙家と雖ども、三週日之れを廢せば、直ちに其臭氣と、刺戟とに堪へ得ざるまでに至ると云ふにあらずや、これ與みし易き嗜好のみ、嗚呼社會の學生諸子よ。何ぞ之を斷行せざる、吾人は諸子と共に克己の第一着手として、先づ酒精と、ニコチンとの中毒を防遏せん事を希望して止まざるものおり。

文苑

漢文

杯記

特別會員　服部愛軒

杯一事直徑四寸九分有奇深稱之可盛一合四勺塗朱殷然中有櫻花圖金泥畫之傍書謹贈爲紀念滋賀縣第一中學校生徒一同十數字嗚呼是生徒諸子贐余者安得不愛重哉顧余之在彥根殆五年今茲初夏將辭去也諸子刻余文若干篇藏之又開盛莚祖道更有此贈焉何諸子愛余之深也方今中學所整頓多在智体兩育至德育則未全盛偶唱之者亦唯喋々發於口舌耳察其所行則可議者不少其間致紛擾豈悉生之罪也哉余也迂拙百事不如人常恐諸子不服余敎潛笑其迂乃今如此殆不知其爲何故徒自恥耳然以余之迂拙爲其所愛至於此世之碩學良師聞之則必將樂爲諸子執敎鞭所謂德育與智体兩期併進可期日待矣又何紛擾之有余之所以喜而不已也夕陽已收竹扉將鎖之際把此杯滿酌淋漓特覺酒氣之芬芳也遂作此記併書謝諸子明治壬寅秋九月愛軒迂人題東京四谷自適齋

斷雨殘雲錄

特別會員　新井無二郎

斷雨とぼそをうつの夕、殘雲嶺にかゝれるの朝、はれもやらぬ時雨のそら、旅中の徒然いはん方おきに、荒れたる庭は、かきもはらはねば、青桐の葉堆くて、飛石半埋まり、古りたる蛛網は、處せくひきわたして、

黃ばみたる松の葉をかけとゞむ。あはれ幾そ秋の暮ぞ、景はとこしへに懷舊の情を溫め、年々歲々過去を撮影して、吾人の往く處に髣髴せしむるよ。いでや、むかしに變らぬ、此の寫眞の前に對して、樫の木の實のひと言も、云はでやみおんは、無下にくちをしかるべし。

おのれ弱冠のむかし、笈を負ひて、東都にまうのぼるとて、氣車は逢坂山を越えぬ、望月の駒、關の清水おど、忍ぶるまもおくて、漫々たる鴉の海づらは、あらはれ出でぬ。樂浪や志賀の都の、古き面影は、人麿の歌をよすがおりしに、まのあたり見る山風水景、得も云はぬ感愴は無量おれども、さすがに低回踟躕のすべもおくて、すぎゆく

心ゆく氣車のおがめもけふばかりおづめむかしの影を忍ばん

朝日影、山を離れて、湖上の景色得も云はぬに、たちつゞく並木松の木かげを、をりふし來合せたる、大津聯隊の兵士、列を正して氣車の通過をまつ。馬上の士官がかざせる刀、朝日にきらめきて、をりからの景を添へつるおど、まおぞこに映じて、年ふるまで忘れがたかりしを、思ひきや、こゝに親しみおれて、世をうねの野におく田鶴の、子等が敎育にあづからむとは。ふるさとを出づるとき、友は我を送る大和言の葉あり

一、さゝおみや滋賀のからささきくあれと君がかどでをまづぞことほぐ
二、粟津野のほくろのすゝきめもはるにみそおはすらん四方のけしきを
三、降りつもる比良の高峯のしらゆきに君が務の高きをぞしる
四、三井寺のかねて聞きこし言の葉を君がかたみと常に忍ばむ
五、石山のつきぬ學のおくそこをおほいやふかくさぐりませ君
六、秋ふかく堅田におつるかりがねに病ある身とたちゐつゝしめ

七、あふみ野や瀬田の長はし長かりし君かあさけをいつか忘れん

八、かへる帆の矢走にいそ〳〵さま見ては夢か忘れそふるさとのこと

昔石上の卿が、志賀の幸に從ひて、よみし歌は、載せて萬葉集三にあり

こゝにして家やもいづく白雲のたなびく山を越えて來にけり

今は、我身も、古歌の中ある人とありぬるかな。

さばれ、江上の客とありにしより、心を傷ましむること、十有四月、夢ありか、寸効那邊にか殘れる。佐和山の月にむかひては、武夫のあがきのおとを忍び、磯山の岸うつ波の夕あぎに、彼の潯陽の琵琶のねをしたふすら、思ふに任せぬ月ごろを、しづくに濁る山の井の、あかで別るゝ我身の秋、

白樂天歌うて曰く、蝸牛角上爭何事、石火光中寄此身、と定めおき世に定めおき、虛榮虛名の末に走れる、群小のおかにしも、また光れる眞玉はありけり。藻に住む虫のわれからと、世をはかあみ、人をかこつ、愚をばあさじあ、

井の中の蛙の、水を樂みて、宮殿樓閣と思ひ、斥鷃とて、夢ばかりある鳥の、一二寸を飛びて、こよあき樂みと思ふめる、足るを樂むは、さる事あがら、小あるかあ生涯の思出、あはれ彼等が前に、大鵬といふ鳥の、一羽に千里をかけることを、見しめんよしもが。

「おき名ぞと人にはいひてありぬべし、心のとはゞいかゞ答へん」とは、古く後撰に見えたる歌あり。淺見綱齋は、之を誦して誠意の歌ありと云へり。誠意の前には敵あし、いづれに往くとしてか、可あらざらむ。

松崎堯臣の言に、琵琶湖の景は日本の景あり、薩埵嶺より海を望めるけしきは、唐の景ありと云へり。日本の山水を代表せる、眞個の風景に對して、誠意の志を養ふもの、孰か我帝國の偉人あらざらむ。

大奸は忠に似、大慾は無慾に似たりとあむ。僞り多き世の中には、ゐせもの多かり。法螺を吹いて、抱負を語ると辨せんよりも、實行の人とありて、眞の偉人たるを証明せよ。これおん、まことに、近江のや妻船淺のあさよひに、しばしがほども、學びの子らよ忘れてあらめや。

北の荒磯

第五年級　澤村胡夷

※

北風が吹いて吹いて、新らしい竹垣を倒したといふ、その翌日であつた。夕顏の花が昨夜の風で開いたまゝ寸斷々々に裂かれて、未だ匂はぬ菊の蕾が五ッ六ッ畑の中に算を亂してゐた。それくらゐだもの、自分が冷めたい夢を幾度か破られたといふのも、强ち、笑ふ程ではあいので、但し、自分の眠られおかつたといふのは、唯、風が吹いて梢が搖れたからだといふのみでは無い。自分は、風や火事やを少しも恐れおいのである。それもその筈、厚壁の、文庫土藏の片隅に息を凝らして、いつも小さくおつてゐるのだもの。

『たゞ今、荻の濱を出帆せむとするところに候。十八日には小樽に着くべく、海若怒るてふ秋九月、海上無事あれかしとのみ祈り居り候。海の生活にあれざる小生、心もとおう思はれて、この後の航海いかあらむと氣遣はれ候。不一。

遠州丸甲板にて　秀雄』

北も北も、北見の極ての宗谷の岬に近い海沿ひの漁村、そこへ、一家を擧げて引越さうと、梶まくら、幾夜の憂さを重ねて、やう〳〵荻の濱へ着いたといふ自分の友達からよこした書を手にした。その日、その日、その日暮れから、吹き通した暴風。折も惡う北風、

眠られぬ位い自分は彼がいかにこの風に苦しめられただらう……もしや……吹きやられはしぬかつたゞらうか……いや、まさか……

こんな空想は自分の脳裏に往來したので、その所爲でゞもあつたらう、いやな夢――そはかの、友の首が、コロリと闇から闇へ轉輾つた――といふ不吉な夢をみた。で、自分はかの友の身の上が案じられて、案じられて、その日の朝饌も、實は不味かつたので、

※　※

夕風がさわ〳〵と立つ時分、いつも一つゞつ咲いてゆく夕顔が、七つ凋れてけふも一つの、今宵の風を待ち顔な蕾の筆が、朝風に搖られて、空に何をか畫いてゐる。

恰度、かの北風が吹き荒れてから今日は七日目、露がしつとりと下りたその朝で、自分が人を恨んで泣いたといふその曉で――その曉に青森から一通の飛電が舞ひ込んだ。無論、かの友からなのである。

海上無事、けふいよ〳〵本嶋を見捨てる

といふ文意であつた。

※　※　※

痩せた夕顔の蔓が枯れて了つて、人の氣も引きしまるやうな中秋、かの北の風に吹き殘された白い小菊が咲き初めた昨日今日、かの友からは杳として便りがないので、空しく北の空を仰いで、好漢、無事なれかしとばかり、祈つてゐた。

風が吹いて垣を倒した去月の今夜にひきかへて、今宵は風もない、月もない、星もない、たゞ、鉛のやうな雲が重さうに自分等の頭を壓へつけて、蜘蛛の巣にかゝつて居る軒端の桐の一葉さへも、靜まり返つて、一

『北海の荒浪にゆられて、海上二度の暴風に苦められ、からくも、昨日わが目指す里に着き候。荒れまさりたる漁村、寂莫の外何物をも認めず、潮風の身にしみ渡りて、ひたぶるに君がみ空のなつかしう候。高嶺には早、眞白き雪の積れるが見え申し候。いかに寒き地に候かは君が想像の材料にと殘し置くべく候。往來はこの月を限り途絶ゆるとに候。さば、麗かならむ春の日まで、蛇のそれのごと、小さきわが家に冬籠りの生活、村人もそが用意にいそがはしげに見うけ候。ことし、文の交通もこれを限りに致すべう候。不一。

北見の荒磯にて　秀　雄

※　※　※　※

それから一ヶ月の日はいつしか過ぎた。あゝ、樺太から吹き寄せる浪風に、わがかなしき友は小さいその胸に、いくその寂しい思を抱いて、わが湖國の空を望んで居るであらう。また君は君の幻影を追ふて、北見の空に夢神をかつて居る友、われ胡夷の痩せた面輪を偲んでゐて呉れるであらうか。

草堂の青年

第五年級　木　村　二　郎

あゝ月よ、汝は西伊太利の七丘の墟に、微吟して低徊する詩人の額に清光を投げ、北のはて、膓も凍らん寒さの不毛の島を、墳墓とせん健兒の寐顔を、折戸のすき間より照すならむ。今こゝには、心ゆく夜をそゞろにあくがれ出でゝ、金龜の裾野に迚り來し我痩軀を照すなり。

げにこそ夜は更けぬれ、閑としてさゝやきの音もなし。

下には遠近の山、裾のみ烟りて、わたつみのかざしにさせる島の如く、上にはきら星の、嬬娥がまとふ碧の綾羅に、銀砂をちりばめたらんかと疑はれ、金龜の孤城は、虚空に浮ぶ蜃氣樓かとばかりにて、慘悽ある秋の吐息は乾坤を壓す。

唯見る黝面ありと雖、唇堅く閉ぢ、眉目清秀ある一青年、金龜山麓の柱歪める草堂を立ち出でつ、濃き墨をひきかせる杜を背に、もの淋しき群芒をかたへに、冴え渡る十月の天心に向ひて、長嘯一番、その稜々たる滿腔の意氣は、北斗の如く燦たる眼光に溢れたり。知らず彼れや何者、彼れを解せんと欲るものよ、乞ふらくは彼れの獨語にその一端をうかゞへ。

あゝ碌々たる石塊、否あ、濱の眞砂の如き人々のみの世に、われの何とて容れらるべき、オヽ、世の容れずとも些の痛をも覺えじ、われは今修養の道にあればあり、あらず、今は容れられざるを幸とす、光榮とす、かくてこそ、思のまゝに修養の道に、直進邁往するを得るかれ。

されど、我はいつまでも社會に遠かりて、神仙をまねばんとするものにあらじよ、我すでに人に生を享く、天職の存するあり、いかで見よ、天職を行ふに足る準備の成る日は、社會をして、たとひ我を容るゝを欲せずとも、容れざるべからざるに至らしめん。

今修養の險道を猛進するわれを目して、狂とも呼べ、痴とも叫べ、やがては白衣嚴かに、五彩陸離として天にかゝれる、虹のそり橋を踏みて立ちまさむ神の如く、崇高偉大に活動する我れを見て、いかんぞ、目眩き、神おのゝかざらめや。その日社會は改革まりて、美しき、清き、樂き園とかりぬべし、われには今、謹嚴ある師として、無上の慰藉者として、永久の朋として大自然を有す、足らざるかきかり……

はじめ銀鈴を振る如かりし聲も、次第に低うかりて、いまはほのかに耳をかすむるのみ、また聞きわくべくもあらず。時しもあれや、金龜山頂の鐘樓より、般々たる四點の音、死せるが如き天地にどよめきて、餘韻長く無邊際空に消え了んぬ。

巨鐘再び響かず。彼れの衣は重げかるまで、露けくかりぬ。

月は落ちんとして、山の端に立ちさまよひ、雁しばかきて、そのかげやいづら。

客舍の雁

第五年級　野村義雄

秋もやう〳〵すぎぬれば、萩のうは風身にしみて、木の葉ほろ〳〵とこぼるゝ籬の下に、虫の音もやゝ弱りゆきぬ。

さらぬだに、物がかしきは秋かるを、まいてわれは見知らぬ里にさまよひて、戀しき父母とは、雲幾重ともかくへだたりて、言葉さへかへすよしかきわが身の、いかにつらきよ、またかかしきよ。

紫の夕雲うるはしう薄れゆきて、三日月の影淡き夕、空鳴き渡る雁がね二つまた一つ……ふと思ひ出づる故郷のこと、わが汝をきゝて心うごかすごと、たらちねの父母もおかじく、汝が聲をきゝたまひて、さぞやみ心をおどろかし給ふらむ——あゝしばしまて雁がね、汝は今夜の中にふるさとの空をやすぐからん、あゝしばしまて雁がね！、——もし故郷の空をすぎかば、わが日に夜に幸くいそしめるを言づてやらんに、しばし羽をやすめて、わが心やりの言を、たらちねの父母につたへてよ、やよかつかしき雁がね、戀しき雁がねよ……。